

四国文学旅行

永瀬敏文、安田 潤

(一回生)

夏季の四国文学旅行を振返ってみると、まずあの六月豪雨のことなどについて、序々に記憶がよみがえってくる。

京都を発った七月十一日には、既に雨はやみ、季候も夏らしくなっていたが、沿線にみた六甲の山崩れ、一部不通となっていた土讃線、祖谷溪の道路まで転がっていた大岩などに、豪雨の爪跡がまだ生々して残っていた。

第一日目、私達は高知に向かったが、途中土讃線では、小雨そぼ降る祖谷溪でバスに乗りかえたり、道路側の家に裏山から崩れ落ちた土砂が流れ込んでいるのを見たり、その道中は穏やかではなかった。翌日も、雨の中を高知の市内の文学遺跡——主に紀貫之関係のもの——を見て廻ったが、貫之の屋敷跡が何処やらバスガイドも知らず、そういう所を訪ね／＼しながらバスを巡らすというのも、文学旅行ならでのことと

思った。午後から、二日目の宿泊地足摺岬へ向かったが、途中天候も次第に回復してきた。

高知県は四国山脈に遮られて、いまだに交通機関の不自由なところで、土佐佐賀から足摺岬まで五十軒ばかりをバスに乗り継いだ。海岸線を走るバスからは、太平洋に突き出た足摺岬が紺青の海と白い雲のなかに浮ぶように見えているが、いりくんだ入江を曲り／＼行くので、思いのほか時間がかかった。道路も悪く、ほれて／＼ほれて抜いているところから、恋愛道路とか笑窪道路とか洒落た名前をもらっていたが、こうした道を揺られ／＼てようやく足摺岬に辿り着いた。途中、中村市では幸徳秋水の墓に寄った。当時、大逆という汚名を着せられて死んだ秋水の墓石は、小さくて粗末なものであった。

夕方、田宮虎彦の作品に描かれて以来、急激に増えたという自殺の名所を見た。数十丈という断崖の下には、ブルーブラックの海と、所々に頭を出した岩と、それを取り巻く白い波がある。そういうえば、その色

彩の中にもう一つ赤いものが加わり、しかもそれが引きつけるように感じられて、思わず後ずさりした。

三日目の足摺岬から松山までの行程では、南国の風景を存分に楽しんだ。この恋愛道路の揺れと、車窓から入る涼風は、盛んに眠気を誘ったが、「夏草や潮の香りし魚飛ぶ」とか「トンネルや笑窪悲しも今日もまた」「鬼百合や君と別れてバスの中」など、各々が記した言葉をつないだ名句(?)を作りながら行く旅は、殊のほか面白かった。

旅行最後の夜は、道路温泉で過ごした。

文学旅行の恒例というビール付の夕食の後、和田先生を筆頭に、一同は「坊ちゃん」が入って泳いだという共同浴場へ行った。等級によって浴衣、石鹸、手拭のサービスが違っていて、我々は最上級の料金を奮発したが、何んのことはない。入る湯舟はみな同じであった。上級生の一人が、茶目ッ気を出して、かの「坊ちゃん」のように、犬かきをもって泳いだ。一生懸命泳いで行き当った所で、ヒョイと顔を上げると、そこ

には「坊ちゃん泳ぐべからず」と札がかかっていた。宿では、前年の旅行で西瓜を食べて当ってから食べるという上級生の忠告を無視して、大きい西瓜を食べたが、大いに美味く、別状はなかった。

最終日は、松山の文学遺跡を巡った。漱石、虚子、子規等等、明治の文豪のそれらは、一寸他の場所ではみられない庄巻であった。公園の物見台に登り、万葉集の「熱田津に云々」の地がどこにあったかを、あたかも当時知っていたかの如く、本田先生が詳しく説明してくれた。子規堂の前には「坊ちゃん」の乗った頃の電車が保存されていて、一行はそこで最後の記念写真を撮影した。子規堂を後に、松山城などの市内見学を終えて、正午に松山駅で文学旅行の一行は解散、各々の帰途についた。

七月十一日～十四日

△行程▽ 京都―神戸―高松―高知(一泊)
―土佐佐賀―足摺岬―宿毛―宇和島―道後(二泊)―松山(解散)

参加者、和田教授、安田助教授、本田講師
他 二十名

北陸旅行の想い出

瀧 淑子 宮崎まり子

水谷和子 村田麻奈

山田榮子 山本幸子

―わたし、何も覚えてないわ。どこが良かった?。

―そうね、土産物屋の試食がおいしかった。

―自己紹介も面白かったわ。

―あの先生、授業とちっとも変わらないわ。

―兼六公園、きれいだったね。でも雨が降っていて残念だったわ。

―あら、永平寺の方が良かったわ。あのすりこぎ(永平寺の名物)ほしいわ。

―あのお坊さん、いばつていやーね。いやな感じね。でも普通のお寺と違って禅宗のお寺らしくて、何かスカッと

して気持ち良かった。心が洗われたみたいだわ。

―コカ・コーラの味みたいね。(笑)
―電車からの北陸の田舎の風景も良かった。

た。

―旅館の待遇が良かったわ。御飯もおいしかった。

―お風呂がすごく塩からかったね。

―首洗い池は草ぼうぼうで気味悪かったわ。

―ホントニ。気持ち悪いわ。お化けが出て来そう。(笑)

―芭蕉の句が良かったわ。

―無残やな兜の下のきりぎりす

―あら、よく覚えてるわね。私ちっとも知らなかったわ。

―安宅の関って「いとおかし」。(笑)

―わたし義経好きだわ。

―弁慶も面白いわ。

―富樫って偉かったのね。昔ならの事ね。

―それに比べてこの世は世智辛い。

―ちょっとした人生観ね。(溜め息)

―先輩の方がうたって下だった話の事思い出すわね。

―あそこの日本海、素敵!

―加賀の千代(興聖寺)も行ったけど、あんまり印象なかったわね。